

私は今回の北京での研修を経て、大学というものやそこに集う人々について深く考えなおすことができました。

今回主に訪れたのは、中国でトップレベルの学力・研究力を誇るとされる北京大学と清華大学でした。その中でも特に教養教育や全人的教育に力を入れるいくつかの組織を訪問し、見学や交流・ディスカッション等を行いました。国内トップレベルとされる大学の、さらに中でも教養教育を重視する組織という点では、今回の訪中の主体であったEAAという組織と通じ合うところがあり、しかしいくつかの点で大きく性格を異にしていました。

まず、北京で両大学を訪れると、キャンパスの様子の違いに目が行きます。第一に、両大学では、広大なキャンパスが計画的に建設されているように感じました。具体的には、現代的なビルが立ち並ぶ地区、非常に古い来歴を持ち伝統的な意匠に彩られた建築物が残されている地区、実用的で無骨な印象さえ与えられるような建物が団地のように連なっている地区、美しく整えられた池や木々などによって風光明媚な公園のようになっている地区など、明確にキャンパス内が区切られているようでした。第二に、いくつかの門では顔認証のゲートが設置されており、人の出入りが明確に管理されているようでした。これが構内のセキュリティの確保という意味を持つのか、あるいは学生運動などへの牽制の意味を持つのか、評価は必ずしも一面的ではないでしょう。

さて、両大学の学生さんとの交流の中では、彼らが受けている非常に集約的な全人的教育の様子が伺え、しかし一方で過激な競争による弊害を皆が口々に唱えていたことも印象的でした。寮生活の中で四六時中共同生活を送る中で、授業以外の様々な面で仲間と協力し、あるいは切磋琢磨しているのだそうです。教養教育のカリキュラムは非常に充実しており、万事に通じたエリートを育成しようとしていることは明らかでした。寮生活の場も設備や環境は非常に充実しており、課外活動や余暇まで含めすべてがサポートされている印象を受けました。しかしそれゆえに厳しい成果主義や競争原理がはたらいていることも見て取れました。学生さんたちの生の声の中で「圧力」(プレッシャー)がキーワードであったことも、指摘しておかねばなりません。

こうした様子を見るにつけ、東京大学の全般的な傾向との違いは明白でした。たしかに東京大学でも、キャンパスでは入退構の管理が一部で厳格化されていることや、またカリキュラム改革において学際的・分野横断的教育への期待感が高まっていることなど、部分的には北京の両大学で見られたような傾向も見いだせないわけではありません。しかし、その実際の遂行の程度において彼我の差は歴然としていたように思います。もちろん、その背景に、現代日本の国立大学法人におけるファイナンスやガバナンスをめぐる環境があることは指摘できるでしょう。しかし、学生たちや教職員たち、そして学生たちを送り出してきた家族や大学を取り巻く社会が、大学に何を期待しているのかという点が根本的に異

なっていることも指摘できるのではないかと考えさせられました。平たく言うと、例えば学生たちが社会的にエリートであることを自覚しているか、あるいはそうあることを求められているか、という点であり、あるいは大学が生産する知識を社会がどのようなものとして受け止め、またその生産において構成員たちがどのような自負を抱いているか、その実現のための施策をどのように打ち出しているかという点がわかりやすいところだと思います。

このような大学の姿を通して、そこに集う学生たちがどんな自己像や社会像を心に描いているのかという問題は、両国において、そしてこの国際社会において、将来数十年にわたって大きな意味を持つ気がしてなりません。

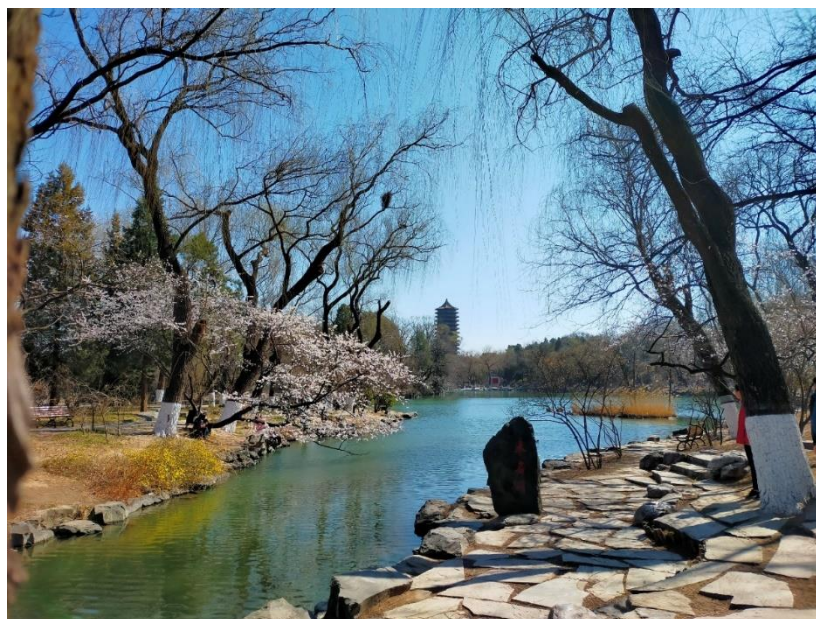


写真1 北京大学構内の未名湖



写真2 清華大学でのディスカッション